

---

# 禁忌のナルコティック

ぶくぶく金魚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

禁忌のナルコティック

### 【Nコード】

N3780BA

### 【作者名】

ぶくぶく金魚

### 【あらすじ】

親友夫妻の死によって孤児になった子を引き取った義理の父親、西條雄一。

そんな彼は美しく育ち慕ってくる娘、咲耶に対して自分が許されざる欲を持ち始めているのを理解していた。

彼は自分を嫌悪し必死に押さえつける。

そんな彼を慕う娘もまた、自らを嫌悪していたのだ。

自分が「狂人」である事を理解していた。

これは父親と男という二つの感情に苦しむ父と自らの狂気を嫌悪し

ているヤンデレファザコン娘の恋愛話である。

## 「義理の父娘」（前書き）

思いついたので適当に書いた恋愛物。

全部で二十話ぐらいです。

R・18的な描写はしませんが、仄めかす描写は出てくると思いますが。

後、義理とはいえ父と娘の恋愛ですから「うげえ」という気持ちを持った方はスルーして下さい。

「義理の父娘」

「雄一さん」

妙にぼんやりとした空間で声に気がついて目を向ければ、そこに居るのは走り寄ってくる女の姿。

しかし、その姿は異常であつた。

肌色の面積が異常に多い。

二つの白以外の部分は全て肌色。

「雄一さん」

俺の名前を呼びながら、そのふんわりとした柔らかい体で抱きしめて来る。

揺れる長い黒髪からは、甘い柑橘類の匂い。

甘酸っぱい、未成熟ながらも熟れ始めてきた女の匂い。

「……さん」

手が勝手に動き、名を呼び続ける彼女を抱き返す。

暖かい。

人肌の温かさを直に感じる。

ああ、そうだ俺も彼女と同じで肌色。

服を着ていないのだ。

そうだと、認識した途端に手が動き彼女の胸部に着いている邪魔な白を取るうと動く。

「……さん」

彼女は抵抗しない。

それどころか微笑んでさえいる。

俺はその「見慣れた笑顔」に彼女の頭をポンポンと撫でて……。

「……………ッ！」

顔が引きつった。

背筋には冷たい氷が押し当てられたような寒気が走る。

瞬時に離れようと身体を動かそうとしたが、思うように動かない。

それどころか、俺の手は意を反して彼女を引き寄せている。

顔が近づく。

「見慣れた顔」を淫靡に赤く染め、目を瞑り、俺の口に近づけて来る彼女。

「お父さんッ！」

「はッ!？」

目を開けた先に居たのは俺の事を心配そうに見つける女。

その女の姿は先程まで抱きしめていた「彼女」の姿と変わらない。

自分を照らす蛍光灯の灯りに気がついた時にようやく、自分の今の状況を把握した。

夢、そう、夢だったのだあれは。

「大丈夫ですか、かなり魔されていたみたいですけど?」

心配そうに俺を覗き込んでくる彼女。

その顔が先程まで見ていた「夢」の彼女と被る。

「ああ、大丈夫だ。ちょっと悪夢を見ていた。

顔でも洗って、目を覚まして来るよ」

そう言った後にベッド代わりにしているソファから立ち上がり、洗面所に向かう。

まったく、どうしたものか。

最近、どうにも俺は人の道を外れたがっているらしい。

義理とはいえ十年の付き合いの「娘」を対象に淫夢を見るなんて。

## 禁忌のナルコティック 第0段階 「義理の父娘」

冷たい冷水を顔に掛けて、気持ちを鎮めながら考える。

全てのきつかけは今からそう、十年程ぐらい前。

孤児院時代からの親友が死んだ。

寡黙であった俺を引っ張り、遊びに無理矢理引きずり出されたのが付き合いの始まり。

笑って、泣いて、時には殴り合いもした親友。

そんなあいつがあっさりと死んでしまった。

交通事故、居眠り運転のトラックがセンターラインを超えて正面衝突を起こしたのだ。

その日はあいつら夫妻の娘の誕生日。

娘と一緒にプレゼントやら、ご馳走を買っていた帰りの話だった。

家に帰り、警察から連絡を受けた時には呆然とし受話器を落とした記憶が今も覚えている。

そして、警察から絶望的な連絡を受けた事も。

あいつとあいつの嫁さんは駆け落ちをしていたのだ。

あいつと付き合い始め結婚も考えた出した所で親が結婚相手を用意したらしい。

嫁さんは良い所のお嬢さん、会社にとって有益となる相手との縁談話だったのだ。

今の時代で、政略結婚なんて笑えてしまいが少なくとも親は本気だった。

結果、友人夫妻は駆け落ち。

幾ら話をして聞かぬ親を見放し、縁を切って結婚したのだ。

警察から受けた連絡によれば、一番友人と親しい人物が俺だと判断して連絡をして来たらしい。

俺と同じで院で育った孤児である友人や実家と絶縁状態の嫁さんは、面倒を見てくれる親類縁者がいない。

俺は躊躇せずに、引き取り手として名乗りを上げた。

収入は心細かったが、借金をしてでもあいつらを弔ってやりたかったのだ。

幸いにもあいつが勤めていた会社や共通の友人、孤児院の先生からも援助を受ける事が出来て、それ程に重い負担をかからなかった。

そして一番の問題が表れる。

あいつらが残した忘れ形見、母親に守られたお陰で無事だった娘の事。

これは本当に問題となった。

親類縁者がいない以上、養護施設かどこかの家の養子として引き取られる予定だったのだが本人の希望が俺の元に引き取られる事だったのだ。

俺は何度も友人から家に呼ばれ、忙しいあいつら夫妻のガス抜きの日を作る為に娘と遊んでいた事がある。



妻はおるか、恋人もない俺としても休みの日は家で引きこもるだけだったので、要請があり暇さえあれば行っていた。  
親類縁者がいない、あいつの家庭によつての叔父の役割だったのだらう。

親の次に知っていて、家族同然で親しい人。

本人も希望としているという条件なのだが、それでも多数の反対があった。

まず第一に俺は結婚していない。

親として引き取るには結婚していなければ厳しいのだ。

次に収入、空き時間、家の大きさ。

そして俺の出自の問題もあった。

養護施設育ちの孤児、指導員に育てられたとはいえ子育てを経験していない俺に預けるのはどうかという意見が出たのだ。

当たり前の話だらう。

俺自身、無理な話だと思っていた。

しかし、幼い身の上で両親を失ったという大きなショックを受け、環境の変化を恐れる娘の様子を間近で見させられていた俺はどうしても、彼女の願いを聞いてやりたくなってしまった。

娘、咲耶の名前をあいつらと一緒に捻り出し、成長を見守ってきた俺としては彼女が自分の服に縋り付いて願った、その願いを叶えてやりたかったのだ。

「叶えた結果がこれとはな」

用意されていたタオルで顔を拭き、完全に目を覚ました思考を覚醒させた俺は呟く。

努力の末に彼女は俺の「娘」として生きていく事になったのだ。それ以来、二人三脚で育てる側も育てられる側も一生懸命にやってきた。

そんな咲耶も来年には大学受験を控える年齢。

もうすぐで終わる、二人三脚のペースを俺が乱そうとしている。

「……っ、よしッ！」

冷えた頬をパチンと叩き、気合を入れる。

俺がこんなでは、墓前で任せると啖呵を切った顔向けが出来ない。

タオルを片付けリビングに戻れば、エプロンを着けている咲耶が既に座って待っていた。

「すまん、待たせたか？」

「ちつとも。お父さんを起こす為の時間より短いですから」

そう言っただけで娘に髪を思わず掻いてしまう。

「この寝起きの悪さも直ればいいんだけどな」

「別にそこまで気にしていませんよ。」

素直に起きてくれるだけあって、お父さんは良い方です。

起こすと、理不尽に怒る人もいますから」

「でも、社会人としてはなあ。」

四十にもなろうとしているのに、毎朝娘に起こされなければ起きないのはさすがに恥ずかしい」

「じゃあ、明日の朝は期待して見守っていますね。」

……それと、もう食べませんか？

暖かい方が美味しいと思いますし」

「すまん、すまん、そうだな」

そう言いながら彼女の前に座る。

目の前には湯気を立て美味しそうな匂いが鼻腔を擽ってくるご飯と味噌汁。

加えて、中央に置かれた皿にはふんわりとした卵焼き、こんがりと焼き目がついた美味しそうな塩鮭もあつたりと古き良き日本の朝食が置かれている。

咲耶が俺の目を窺う。

それに頷くと、俺は手を合わせた。

見た咲耶も手を合わせる。

「いただきます」

食前の挨拶が終わると同時に俺達は食べ始めた。

口に入れただけで分かる、ふつくらとしたご飯の美味しさ。

味噌汁や塩鮭もご飯をさらに進ませるような見事な出来具合。

本当に今時の女子高生とは思えないな。

それも、全ては俺に引き取られた故の弊害だが。

最初は俺がご飯を作っていたのだが、何時の間にか彼女に仕事を取られてしまった。

今では家の全ての仕事を任せている。

まあ、洗濯は年頃という事もあり任せるのはやぶさかではないが、買い物や掃除、炊事までやってしまうようになったのは予想外だった。

仕事で忙しいのもあり、自立の下準備なと思って任せてしまった結果がこれ。

今では近所の主婦と渡り合える程に家事に精通させてしまったのだ。お陰で、年頃の娘らしく友達と遊びに行っている姿を殆ど見ない。ワシントン条約で守られる必要があるぐらいの絶滅危惧種の良い子

であるが故に注意する事も出来ない有様だった。

「…………お父さん。今日は遅いですか？」

一通り食べ終えた娘から、質問される。

「んー。特に予定は無いから何時も道理だと思っが、咲耶は何か予定でも？」

「無いですよ。」

晩御飯の準備初めの時間が知りたかっただけです。

じゃあ、晩御飯は何時も通りに準備しておきますね」

淡々と答える娘。

しかし、高校生なんだからもつと遊んでも良いと思うのだが。

「あのな、咲耶」

「何です？」

小首を傾げて食器を片付けながら問いてくる。

「そんなに家の方は気にせずにもつと友達と遊んで来てもいいんだぞ？」

こうやって家事をお前に任せてはいるが、俺も出来るしな」

「……………ふふっ」

俺の質問になぜか笑う娘。

「なぜ笑う？」

「いや、だって、お父さんの言葉が面白くて。」

その言葉って娘に向けて「父親」が言う言葉じゃないでしょう？

えっと、遊ばずに家で勉強しろー！とか、六時までには帰って来いー！とか言っんじゃないんですか？」

それは「出来ない子」が言われる言葉であって、咲耶は「出来すぎている子」。

むしろ、遊ばない事で起こる弊害の方が俺にとっては怖い。

「別にお前は勉強をしていない訳でも無いし、夜遅くとも危ない場所くらいは避けられるだろう。

それでも危なければ、俺を呼べばいいだけの話だしな。

日頃から色々世話になっているんだ、ボディガードぐらい喜んでするさ」

俺がそう言つと、人差し指の右手を顎にやる咲耶。

何かを考える時にする彼女の癖だ。

「……気持ちは嬉しいですけど、いいです。

何度も言っていますが、大勢で騒ぐよりかはこうやって家でのんびりする方が好きですから」

家でのんびりといっても、お前の場合は何かにつけて家事やら勉強やらをしていて休んでいないように見えるから遊ぶ事を勧めているのだけだ。

と、思ったが今は朝で時間も無いしこの話題はまた今度にしておう。

「お前がそう言つのなら、仕方ないか。

それと、ご馳走様。今日も美味しかったよ」

「お粗末様でした。ちょっと待っていて下さいね。

今、お昼のお弁当の準備もしますから」

そう言つて俺が置いた食器を流し台に持つていく咲耶。

黒のセーラーに袖を通し、白のエプロンを身に纏っている。

以前に家に招待した同期の連中が俺に対して幼妻持ちと冗談でからかっていたが、あながち間違いとは言ひ切れないかもしれない。

手作り弁当を毎朝作つて貰っている辺り、本当に否定出来ないな。

咲耶が通う学校では給食が無いから購買か持ち込みになる。

最初はお金を渡して購買で買つて貰おうと思つたが、勿体ないと言われ彼女が作る様になつてしまった。

そうしたら一人分も二人分変わらないと押し切られ、今では俺の分の弁当も作つて貰っている。

家の食事情を任せている以上、我が家の経済事情を把握しているが故の行動なのだが……正直、かなり問題がある気がしてならない。

「……？」

俺の視線に気がついたのか、咲耶が視線を合わせて来る。

それに手を振つて、何でもないという意を含めて返すとスーツを持つて脱衣所に向かう。

さて、今日も一日頑張るとしよう。

昼休み。社内の空いている一室にて、ある男と一緒に昼食を俺は食べていた。

「相変わらずの西條の弁当は咲耶ちゃんの愛がこもっているなあ」

俺の弁当箱を見ながらそういう男、山下毅。同期であり、家にも来た事がある男。

それでいて俺より早く出世している辺り、立ち回りは数倍も上手だ。

「お前には言われたくない」

言って見るのは奴の弁当箱。

そこには大きなピンクのハートマークがご飯の上に作られていた。

山下夫妻は結婚して十年以上は経っている筈なのだが、未だに新婚気分を続けているのである。

本人曰く、「死ぬまで共に生きようと約束した連れなんだから、何時までも変わらない」という事らしい。

部内での評判どころか、社内一とまで言われる鴛鴦夫婦。

こいつの出世の一因には、奥さんが完璧に家の事をこなしている事もあるだろう。

そして山下はその働きに答えるように功績を上げ続けている。

その奥さんに俺は本当に頭が上がらない。

男として生きてきた以上、女の事情が分からない事もあってこいつ経由で何度助けて貰った事か。

「悔しかつたら、お前もそろそろ相手を見つけたらどうだ？

咲耶ちゃんもかなり大きくなっただろう。

もうそろそろお前自身の事を考えてもいいんじゃないか？」

「別に悔しくは無いが、確かにそうだな。

咲耶が安心して巣立つ為にはそういう相手が必要だとは思っている」

今の懐き具合だと、俺が痴呆老人にでもなったら介護の為に自分を投げ出しそうで怖い。

一応、そうなったら施設に入る予定だが心配はさせてしまっだろう。

その為にも妻は必要なのだ。

「そういう意味で結婚しろと言った訳では無いんだが。しかし、意外だな。」

西條が結婚についてそこまで真面目に考えているとは。てつきり、咲耶ちゃんを嫁にする！とか親馬鹿を言い出すのかと思っていた」

「洒落にならない冗談はよせ。部内のおばさん連中の間で噂されている俺のあだ名を知っているだろう？」

本当に洒落にならないあだ名を俺は持っている。

「源氏の君だったか？まあ、言িয়েて妙だからな。その弁当といい、家での様子といい、本を書けば売れると思うぞ？あんな良い子に男親一人で育てたんだ、俺もその育て方の極意を知りたいよ」

咲耶は紫の上で、俺は源氏の君。本当に洒落にならない。

「ただの反面教師だと思うが」

俺がそう言つと、山下は大きいため息をした後に全て食べ終わった弁当箱を仕舞うと俺に言う。

「……まあ、いい。」

それで相手はどうやって見つけるつもりなんだ？」

「まだ考えてもいない。」

とりあえず、咲耶が大学に入ってからの話だ」



これから咲耶は大変な時期に入るのだ、大学に行けば今よりかは咲耶だって外に目を向けるだろうし、自分に目を向けるのはそれから良い。

「そうか。」

とりあえず、婚活パーティーだけは止めとけよ。

あれは金と時間の無駄だ」

「分かっている。」

部長の話を聞けば、誰でもわかるよ」

今年で五十になる部長が出た婚活パーティーは酷い物だったらしい。本人の言葉に従うならば、「檻が無いサファリパーク」。

見事に参加費用の五万円をばったくられた拳句に肉食獣に滅茶苦茶にされたのだと。

探せば良い婚活パーティーもあるのかもしれないが、そこまでして結婚をしたいという気持ちは無い。

今の時期を過ぎれば、仕事も落ち着いてくるだろうし、それから老人会のような場所でパートナーを探せばいいと思っている。

別に枯れてはいないが、この年代になって若い時みたいに終始飢えている訳でもない。

一緒にいて苦しくない趣味が合った人を探せばいいだけの話なのだから。

「それならいいさ。」

じゃあ、そろそろ戻るとするか」

そう言われた俺も咲耶に貰った弁当箱を片付け終わっている。

しかし、不便というか。

手作り弁当持ちは自室のデスクで食べてはいけないなんて不文律は

作ったのは誰なんだろう？

「ただいま」

「おかえりなさい、お父さん」

家に帰って扉を開けると、そこには朝と同じよう制服の上にエプロンを纏った咲耶が出迎えてくれた。

時々、冗談で三つ指をつけて出迎えてくれる事があるから心臓に悪いのだが、今日はそういう悪ふざけはしていないらしい。

「良い匂いだ、今日は肉じゃがか？」

「そうです。」

お肉屋の政さんが特別サービスで、とても良いお肉を下さったので美味しいと思いますよ？」

下町に家があるが故に未だに徒歩圏内に肉屋なんて物が残っている。肉屋だけじゃなく、八百屋もあり、小学生の頃から主婦の真似事をしてきた咲耶は珍しくて覚えられており、結構色々と優遇をして貰っているのだ。

まあ、親の贔屓目もかなり入っているが美人なのは役得という物なんだろう。

お陰で俺が商店街のおばさん達から、色々とあらぬ噂をされる原因にもなっているが。

「そうか、ならそれが冷めない内に食べるとしようか」

「はい。じゃあ、準備をするのでお父さんは着替えて来て下さいね」

そう言うと、彼女は嬉しそうに笑って振り返り歩いていく。さて、とっとと着替えて咲耶も楽しみにする肉じゃがの味を堪能するでしょう。

ほかほかのじゃがいもとたっぷり旨い汁が染みこんだ肉、にんじん、玉葱、葱が絶妙なハーモニーを生み出す肉じゃがを食べ終わり、風呂にも入って、リビングの寝台兼ソファに寝転がってぼーっとテレビのバラエティーを見る。

趣味の読書の為の本は溜まっているが、明日も早い。

俺は一度読み始めると終わりまで読まなければ我慢が出来ない人間なので、読む訳にはいかないのだ。

芸人のつまらない内輪話を耳から素通りさせている内に眠気がようやく訪れた。

テレビを消し、リビングの明かりを消すと、目を瞑って眠りの世界に……。

「あの、お父さん」

聞こえてきた声に目を開ければ、そこにいたのは白い湯気を放ちながらしっとりと輝く黒髪を結い上げた風呂上りのパジャマ姿の咲耶。

その時点で用件は分かったが、念の為に聞いておく。

「どうした、何かあったのか？」

「そうではなくて……………」

顔を俯けて、風呂上りの火照りとは違う朱色で頬を染める。

彼女が俺に問いているのは実に簡単。

一緒に寝てもいいのかという質問だ。

俺が彼女を引き取る要因にもなった事だが、咲耶はPTSD（心的外傷後ストレス障害）を発症している。

彼女は救出されるまで、俺でも思わず最初に見た時は吐いてしまった冷たい壊れた両親の死体と密閉空間の中で閉じ込められていた。

今はもうかなり治りかけてはいるが、それでも唐突にトイレに駆け込んで吐いて、泣き叫ぶ事がある。

特に危ないのは夢なのだ。

夢では今でも正確に当時の状況を再現してしまうらしい。

小学生時代はそれこそ毎日のようにそんな夢を咲耶は見続けていた。病院で半狂乱状態で眠る事が出来なかった彼女をあいつの家で一緒に昼寝をしていた時のように抱きしめて添い寝をしていたら、専門化が言うに曰く暖かい生きた人間を感じ取れるという安心を得られて、悪夢を見なくなっていたのだ。

とは言っても、中学生にもなれば幾ら父親とはいえ、男である俺とは添い寝は恥ずかしい。

故に、今では悪夢を見そうな時にこっやって懇願をしてくる。

「構わないさ、おいで」

そう言って、布団を持ち上げた。

咲耶は近づき、ゆっくりと中に入って来る。

そしてひしつと俺の背に両手を回し、自分の身体を引っ付けると言った。

「ありがとうございます。……………おやすみなさい、お父さん」  
「ああ、お休み、咲耶。良い夢を」

頭を撫でてそう言うと、咲耶は目を瞑る。

そうしてしばらくすると、俺の胸に顔を置いてある咲耶からは穏やかな寝息が零れだしていた。

その寝顔を見守る傍ら、必死に俺は殆ど暗記してしまった般若心経を唱える。

なんというか、実に不味いのだ。

母親以上に育ったメロンかと疑うような膨らみを押し付けられ、風呂上りの爽やかな匂いに隠れて形を見せる女の匂い、そしてなによりもその暖かさ。

人としては最悪な事は分かっているが、気がつけば俺の「ケモノ」が反応しかけていた。

朝の時の夢といい、激しい自己嫌悪に襲われる。

娘にした子、しかも二十以上も年が離れた相手に向かって俺は一体何を考えているんだ！

煩惱退散と心の中で呟きながら、最後には気絶するように意識を闇の中に落としていった。

## 「義理の父娘」（後書き）

ちなみに作者はハッピーエンドも好きですが、バッドエンドも好きです。

一応、二つのエンドを予定しています。

どっちかは最後までエタらずに書ききれたら決めます。

## 「咲耶の黄昏」(前書き)

今回は咲耶さん視点のお話です。

## 「咲耶の黄昏」

視界に映るのは、笑っている顔に霧がかかっている一組の男女。  
ああ、やっぱり見てしまった。

動かない身体を確かめると、ぼんやりとそう思考する。

唯一動かせる瞳だけを動かし、周りの景色を確かめれば間違いない。  
『事故の記憶』だ。

証拠に私の小さな手にはまだ、汚れていない真新しいぬいぐるみが握られている。

完全に脳に焼き刻まれた記憶は当時の道路を完全に再現し、エンジンの振動すらも感じさせていた。

達観したような表情で前を眺め続けていた私の視界には、ゆらゆらと揺れるトラックが見え始める。

そのトラックの運転席には忘れる事が無い男の寝顔。

もう、それからは何度も見た予定調和だった。

中央分離帯を乗り越えて来るトラック、それを避けようとする急旋回する私が乗る車、しかし避けきれずに車は横から押し潰されていく。

ママが私を抱え、目の前に跳んで来るのは霞が消えはつきりと分かる半分がグシャリと潰れたパパの首、そして自分の頭から垂れてくる赤い生暖かい生命の水。

それは私の見開いた目に入り、視界を真っ赤に染めていった。

真っ赤な世界の中で自分を守っていた筈のママの身体の熱が失われ、冷たくなっていく。

そしてその世界から色が失われ、視界に映るのはパパとママの死体。



潰れた眼球、見える脳髄、赤黒いピンク色の肉、白い骨、消えていく温かさ。

それを見ても私の心には何も響かない。

既に私はこの人達が死んだ事を、「消えた事」を理解しているから。真に恐怖しているのはこれから見るだろう光景。

再び得た温かみを感じて後ろを見れば「あの時」と同じように涙を流した「雄一叔父さん」が私を後ろから抱きしめていた。心臓が高鳴る。

抱きしめられている事への隠し切れない嬉しさとこれから起こる事への恐怖と絶望に。

世界は逆再生をするように巻き戻っていく。

私は再び車へと、パパとママの姿は消え、代わりに車を運転するのは「お父さん」。

霞がかった物ではない、しっかりとした顔で私に向けて笑顔を浮かべている。

私の身体も幼い時のものではなく、今の物。

恐怖に歯がガチガチと音をたてているのが分かる。

必死に覚める、覚める、願いつけた。

この人だけは取らないで、と必死に「自分」に願う。

しかし、残酷にも再びトラックは対抗車線を走ってくる。声無き悲鳴が口から上がるが声だけでは何も変わらない。

そして同じように再び乗り越えてくる車。

揺れる車内、シートベルトを外して私を再び抱きしめて「ママ」のように守ろうとする「お父さん」。

身体は動かない、ただスローモーションで動く映像を眺めているだけ。

「パパ」と同じように跳ぶ首、冷えていく身体。そして、「両親」と同じように薄れていくその首と胴体を私は眺めている事しか出来なかった。

それを掴もうと必死に闇の中に手を伸ばす。全てを諦めて願ったこの人だけは。

だが、誰もその手を掴んではくれない。何も無い虚空の中で私は一人ぼっちだった。

ドクッ。

「……………ッ!？」

目が覚める。

その瞬間に感じた暖かい「人」の感触。

「……………」

確かめようと、抱き寄せる。

すると直ぐに身体で感じるドクッ、ドクッと脈打つ生命の鼓動。落ちていて少しだけ身体を離して見ればちゃんと首が繋がり、グー、グーと結構煩いびきをかいて熟睡する「お父さん」の姿がそこにはあった。

口からはうっすらと涎も落ちている。

「…………ふふっ」

思わず笑いが出てしまった。

なんといえがいいのか……そう一瞬だが馬鹿らしくなってしまったのだ。

自己分析だが、私は極端な悲観主義者。

そして胸の内には叶う事が絶対に無い夢に対する諦念と絶望を抱えている。

それがクラスメイト達に言わせれば大人な雰囲気らしいけど。

そんな私だけど、このお父さんの寝顔には思わず気が抜けてしまったのだ。

私の危惧を何のその、一般に言えば阿呆面を浮かべて気持ち良さそうに私を抱きしめて寝ているお父さんを見ると、悩んでいる自分が馬鹿らしく思えてきてしまった。

これが一人だったら、私は未だにウジウジと膝でも抱えて自室かトイレに籠り、昏さを出し続けていただろう。

それで戻っても、お父さんや級友達を引かせるような黄昏た雰囲気を出していたに違いない。

「…………ありがとうございます、お父さん」

私はそう言った後に、体温を確かめるように一度だけ抱きしめるとベッドから抜け出していった。

本当はしたいけど出来ない事に対して、一抹の未練を残しながら

「……………」

家の家事を一通り終え、お父さんと朝食を食べ、出勤を見送ってから、私も自分の学校へと向かっていた。

乗っている電車の中で手元に隠して見る、新聞に入っていたチラシ。基本的に買い溜めはせずに必要分を帰りに商店街やスーパーで買うので今のうちに見ておかなくてはいけない。

これを学校で広げるのは出来ないのだ。

公立中学時代は無神経にもそれでお父さんの事を非難する教師が現われた。

子供に家事を強制させていると言いがかりをつけてきたのだ。

幾ら、私が自主的にやっていると言ってもまるで信用せず、どうやって知ったのか知れないが事故にも変な同情をして、忙しいお父さんを平日に学校に呼び出すなんて事をやらかしてくれた。

お父さんもお父さんで言いがかりなのに、教師の自己満足のようない説教を黙って聴くという事態。

それ以来、誰にも自分の家庭の事情は他人には知らせず、見せないようにしている。

学校がある駅に着き、チラシを仕舞い歩いていこうとすると後ろから声をかけられた。

「お早う、咲耶さん！」

振り向けば、犬の耳とブンブンと振られる尻尾が幻視でできてしまいそうな小柄な女子。

高校からの知人である二宮桜の姿があった。

肩まである地毛の茶色の髪はクルンとパーマがかかり、ふわふわと

揺れている。

目は大きく、少し垂れていて本人のみが知らない事だけとあだ名がチワワである事が納得いつてしまう容姿。

「お早う、二宮さん」

後ろから小走りで隣に来た彼女にそう返答をする。

「早速で悪いんだけど咲耶さん、お願いがあるんだけど……いい？」

私の前に出た二宮さんは両手を合わせて、上目遣いになって問う。  
なんというか、昔にテレビでやっていたCMを思い出してしまった。  
消費者金融のCMで父親が子犬チワワに見つめられて迷うという、あのCM。

彼女の姿がそれに見えて仕方が無い。

「いいですけど、一体何を？」

「勉強を教えて欲しいの、今日の三限の数学に出された宿題がどうしても分からなくて」

頭の中で数学の課題について思い出す、授業中に終わらせてしまったが故に家ではやっていない。

今日の三限というか数学？だから……ああ、たぶんあの微積のひっかけ問題。

二宮さんは良く言えば素直、悪く言えば単純。  
ちよっとひっかけがあると、そこでコケてしまいがちなのだ。

「それなら、学校に着いてからでいいですか？」

HRが始まるまでなら、大丈夫ですから」

「本当！ありがとう咲耶さんっ！！」

私の手を握ってブンブンと上下に振り回して喜ぶ桜。

オーバーアクションな喜びだが気持ちは分かる。

あの数学教師は何というか、嫌われるタイプの先生なのだ。

出来る子には当てずにわざと出来ない子に当てて、わざと失敗させる。

それでどこか駄目だったのか、実例を出して懇切丁寧に説明をする先生。

お陰で、クラスメイトの前で恥を掻きたくない為に勉強をさせる効果はあるが、桜は必死に勉強をしているのに恥をかく事が多い。

持ち前のおつちよこちよいと単純さが生み出す凡ミスを繰り返してしまう子なのだ。

その先生に対する苦手意識もあって、理解していても上がってしまいミスする事が多い。

一応、弁解をしておくならばその先生は生徒に質問用メールアドレスも渡して、放課後にいつ質問しに来ててもよいとまでフォローはしている。

二宮さんも最初は先生に質問をしにいたりしていたが相性が抜群に合わなかった、彼女とその数学教師は。

結果、何時の間にか先生の所には通わず私に聞くようになってしまったのだ。

そのまま登校途中は彼女がするドラマや俳優の話に適当に相槌を打ち、学校に着いて席に座ると気がつく。

机の中に入っていた一枚の青い封筒。

思わず顔を歪めてしまいそうになる。

案の定、裏を返せば『西條咲耶様へ』と男の字らしき物で書かれていた。

「ねえ、咲耶さん。もしかして、それって？」

勉強道具を持って、私の元に近づいてきた彼女が問う。  
ため息を吐きたくなる気持ちを含み、笑顔を作った。

「たぶん、そうでしょうね」

騒がれないように指を口に押し当てておく。  
そして手紙も再び机の中に。

私の仕草で彼女はすぐに理解したのか、声を潜める。  
だが、全ては手遅れ。

手紙を出した時点で周りから感じる視線が凄い。  
見れば何人かは誰かの耳に口を近づけ喋っている。

それに気づいていない彼女は私に向かって問いた。

「で、どうするの？」

クラスの雑談は全て消えていた。  
誰もが、あらぬ方向を向いていたりするが耳だけはこちらに向けている。

「読んで会ってみたいな事にはどうにも。

それより、早くどの問題か教えて下さい。  
早くしないと、間に合いませんよ？」

「あ、うん。そうだよ、ごめん。

え、えっとこの問題なんだけど……」

彼女が取り出した教科書とノートを見ながら考える。

今回はどうやって断ろうかと。

そして放課後、手紙を読み指定された場所で告白を受けた。

「ありがとうございます、でもごめんなさい」

それが顔を真っ赤にして告白してきた名も知らぬ男に対する私の返事だった。

「咲耶さん、その様子だとまた振っちゃったの？」

しつこく「じゃあ友達から」と言ってきた男子生徒を宥めすかし、荷物を取りに教室に戻ってみればそこには二宮さんが男と一緒に話をしていた。

「そうですよ。」

正直、一度も話をした事が無い人にいきなり付き合い合って下さいと言われても」

手紙で呼び出しを告白してきたのは上級生。  
それも一度も話をした事がない相手だった

「なら、よくある友達として付き合いましょうというのもしなかったのかい？」

知らない人なら、それで知ってから決めればいいじゃないか。  
悪い噂は無いし、普通に良い人だと聞いていたけど」



そう私に言ってくるのは二宮さんと恋人関係にある一年生の時の同級生、川上忠。

片手で数えられる程度しかいない私が名前を覚えている、唯一の男の知人だ。

というか、相手まで知られているとは。

「友達としてですか……近い事を言われましたが、それもお断りさせて貰いました。

一度告白をしている以上、友達ではなくそういう関係になりたいという事ですよね？

それを受け入れるのは、告白を受け入れるのと変わりが無いと思いませんか？」

私が荷物を片付けながら、そう返答を返す。

「まあ、確かに。

その友達というよりかは準恋人、恋人見習いという感じが正しいのかもしれない」

「それで川上君、友達というのは恋人と同じ様に辞める事が出来ると思いますか？

私にそういう気がない以上、互いに不幸になるだけでしょう？」

友達になると、体面を考えて面倒くさいアピールを拒絶が出来ずに受け続けなくてはならない。

加えて、休日遊びという名のデートもどきをしようなんて魂胆が既に見えている。

友達からというのは、恋人準備期間のような物。

「あははっ。

最初に考えた人は凄いものだね、友達からって台詞」

手に持っているシャーペンを回しながら、彼は笑う

「でも咲耶さん。それだと男の人と付き合う気は無いの？」

私に向かってそう問う、二宮さん。

実際に高校生になってから、これで九度目の告白。

全てをきっぱりと断っている以上、色々と邪推してしまうだろう  
その目の奥には不安と心配の感情が見えていた。

彼女の気持ちは凡そ予測がついている。

川上君を私に取られないのかという無意識の不安があるのだ。

むしろ、彼は私の事を無意識で避けているのに。

川上君は私が押し隠している本性を何となく察しているのだろう。  
しかしその事に気付かない彼女の視点から見ると、学校にいる男の  
人で一番私と親しいのは彼。

古い言葉だけど、川上君にゾッコン状態の彼女が心配するのは仕方が無い。

事実、私と彼女で川上君を取り合っているなんて噂もあるのだから。

「無いと言えば嘘になりますね、だけど今はそういうのは早いと思  
っています」

「相変わらず昭和の薫りが漂うねえ、西條さんは。

それなら初めに付き合う人と結婚するつもりなのかい？」

「それに別にそういう意味ではなく、自分で責任を取れるようにな  
ってからの方がいいという事ですよ」

私が言った言葉に二宮さんはきょとんと首を傾げる。

しかし、川上君はすぐに意味が分かったのか、笑うとすぐに返答を

返してくれた。

「そういう事か。」

いやはや、西條さんのその心構えには恐れいるよ。

確かに、心構えが無い人の末路を知っている僕たちからすれば実に正しい」

「大人の人達が言っている事は間違いではないと思いますから。では、そろそろ私はこれで」

「うん、引き止めて悪いね。また明日」

「あつ、咲耶さん、またね。それと今日の宿題、本当にありがとう！」

「はい、さようなら」

私たちの会話の意味を考えていた二宮さんも慌てて別れの挨拶をして来る。

手を振り、扉を閉じた後で聞こえた甲高い悲鳴を考えると教えられて彼女はようやく意味が分かったらしい。

地元で買い物を済ませた後に、家に戻って残った家事を済ませていく。

朝に干した洗濯物を取り込み、お風呂掃除をし、夕飯の準備。今日のメインである秋刀魚をこんがりと。

お魚が好きなお父さんだし、喜んでくれるだろう。

これ以外はご飯、金平牛蒡、味噌汁、黒豆。

全てを机の上に並び終え、エプロンを外して時計を見れば丁度八時。

お父さんが帰って来るまでは、暇な時間になりバッグを開けて勉強をしようと思えば、携帯が光っている事に気がついた。

どうやら、メールが着ていたらしい。

開けて見れば、差出人は二宮さん。  
昼間に恋人を作るように強制した発言についての謝罪が書かれていた。

「……………」

気にしていないとの意を文面に乗せると送って電源を切る。

正直、携帯電話自体が私にとっては嫌いと言える代物。

メールを打つのも遅く、電話をするのも嫌いという人間だ、私は。  
お父さんの影響もあってか、手紙でやり取りする方が気が楽。

川上君が言っていた昭和臭が漂うのはこういう面については正しいのかもしれない。

しかし、私を恋人に。

思わず、嗤ってしまいそうになる。

こんな気が狂っている女を恋人にしようという愚かな幻想を持っていたあの人に。

断り続ける理由について責任論で彼相手には誤魔化したが本当は違う。

好きな人に殺害を求める気が狂った女なのだ、私は。

根っからの悲観主義者、次の瞬間には死ぬかもしれないという事を私は常に思っている。

だからこそ、共に死にたい。

私と一緒にあの闇の底に連れて逝って貰えるように、置いていかれないように。

好きな人に殺されたい、こんな夢を持っている女が正常な筈が無い

だろう。

ましてや「お父さん」相手にそう思っているなんて。

自然に首に自分の手が伸びる。

お父さんのゴツゴツとした手とは違う白い手。

だけど、幻視する。お父さんの手であると。

あの微笑みを浮かべながら、その手は私の首を絞めていく

「……………っ……………」

血が止まっていくのが分かる。

辛い、苦しい、痛い。

…………… だけど嬉しい。

お腹の奥、子宮が疼く。

さらに首を絞めて何時ものように、手をスカートの中に入れて  
っ！

「ん、んんっ……………はぁ……………はぁ……………っ」

自分の首を絞めようとする手を強引に離し、立ち上がる。  
玄関チャイムの音が聞こえてきたのだ。

「ただいま…………… っでどうしたんだ、咲耶！？  
顔が真っ赤だぞ、風邪でも引いたのか」

心配そうに見つめてくるお父さん。

「だ、大丈夫ですっ！

それより、ご飯が出来ているのでご飯にしましょう！

今日はお父さんが好きなお魚ですから！」

ゴツゴツとした手に思わず生唾を飲み込んだ私を見られないように、渋るお父さんを押して無理矢理リビングに連れて行った。

その後、お父さんときこちないながらも夕食を食べ終えた。

お風呂にも入り、部屋に戻って明日の準備を終えて、気分を落ち着かせて居間に戻ればお父さんがお酒を飲みながら、読書をしていた。どうやら、今日は読む事が出来る日らしい。

昔は毎日の様に何かしらの本を寝る前に読んでいたお父さんだけど、体力がもう無いといって今では仕事が楽な日や無い日に読む様になっている。

「……咲耶も飲むか？」

机の上に置いてあった瓶を見せながら、私に問う。

「では、少しだけ」

台所に行って、自分のグラスに氷を入れて持って来る。

それに瓶を傾けてお酒、日本酒をとくと注ぐお父さん。

グラスの半分ぐらいが満たされると、瓶を傾けるのを止めた。

「この一杯だけな」

「ありがとうございます」

少しだけ口に含むように味わえば、甘い蜜柑のような口当たりがす

るお酒だった。

十分に舌の上で味わった後に、飲み込む。

「とても美味しいです」

「それは良かった」

お父さんは笑った後に再び本に目を落とし始めた。

その光景をぼんやりと眺めながらちよびちよびと注がれたお酒を飲む。

未成年である以上、本当はいけない事だが高校生になった祝いとして、少しでも飲ませて貰ってからは、時々こうやって相手をさせて貰っている。

それに私はお酒を飲んで寝ると熟睡するので、昨日の件から考えて勧めてくれたのだろう。

「……そういえば。お父さん、小さいいですか？」

「ん、何だ？」

再び、目を上げて私を見る。

「今度の週末に付き合って欲しいのですけど、大丈夫ですか？」

「ああ、買物か。勿論、大丈夫だ」

端的に言えば、荷物運び要員としてお父さんが必要。

お米なんかを買って私一人では家まで持ち帰れないのだ。

二人暮らしなのでそれ程の量は必要ないとはいえ、やはり重い物は重い。

それに折角なので、こういった機会には他にも色々と普段では買えない物を買う事になっている。

「では、今週の日曜日にお願いします」  
「了解」

私の返答に頷くお父さん。

それからすぐにしてグラスの中身が私たちの胃の中に消え去った。

「……っ……」

見なくても分かる、私の顔は赤く火照っているだろう。  
思考能力が落ち、意識がぼんやりとしている。

「もう部屋に戻って寝なさい、咲耶」

本を閉じたお父さんが私に向かって言った。

「……はい。分かりました」

グラスを片付け、部屋に戻りながら思う。  
既に絶たれた夢だけど、お父さん。  
心の中で夢を見るのは許して下さい。  
お酒の力で解放されそうな、どす黒い感情を必死に押し殺しながら、  
そう私は願っていた。



## 「咲耶の黄昏」（後書き）

ヤンデレファザコン娘、咲耶さんのお話でした。

テーマは「狂気を自覚したヤンデレ」です。

ヤンデレ的な事を内心求めているのに、正常な意識がある故にそんな自分を嫌悪しちゃう子となっています。

だから自己評価は最悪、故に敬語口調がデフォですね。

さて、次の話で第0段階は終了です。

この段階の元ネタは薬物依存の症状を段階分けした物です。

第0段階はまだ興味があるだけ、第1からは実際に手を出す「罪」を犯した状態となります。

では、その罪を犯すきっかけとなる第0段階最終話も楽しんで頂けると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3780ba/>

---

禁忌のナルコティック

2012年1月10日20時56分発行